

北京市高層集合住宅の暮らしと生活世界の変容

WANG Jiewen
王 傑文

中国伝媒大学

(編訳：西村真志葉)

建築学の視点からみると、高層集合住宅（High Collective House）の生活世界には、少なくとも住宅自体の「建築設計」と、住宅を取り囲む自然的・人文的環境に対する「地区計画」が含まれる。いずれについても統一された基準があり、そこで暮らす人々は抽象化された「人」として処理される。

だが、日常生活の研究を志す民俗学の観点からみれば、いかなる集団の居住形態と生活様式にも、実践的なレベルで歴史、政治および文化の跡が刻まれ、それぞれの時代の習慣や消費概念、生活の風情などが映し出されている。高層集合住宅の生活世界においては、その建築設計と地区計画が、住民の居住形態や生活様式をモデリングしている。つまり、高層集合住宅の建築設計と地区計画がそこで暮らす人々の自然な生活様式を構成し、高層集合住宅という居住形態ゆえに生じる諸事実が彼らの習慣を形作るのである。さらに、高層集合住宅の住民たちもまた、人間が生まれもった内省性と創造性の力を主体的に発揮し、文化伝統の助けを借りながら、新たな生活様式を絶え間なく創出し続けている。そして、一定の建築設計と地区計画に基づく生活様式の規定を逃れ、ある種の「新生活」の可能性を演出するのである。この意味において、規定と創造はつねに日常生活に混在していると言える。

高層集合住宅の生活世界において形作られる慣習的な生活とは、どのようなものだろうか。また生活の主体として、彼らはいかに「新生活」の可能性を創出し、表現しているのだろうか。それは1996年に国連人間居住会議(HABITAT)で掲げられた「すべての人々に適切な住居を保証し、そしてより安全、健全、かつ平等で、より住みやすく、持続可能で生産的な人間居住の実現」という目標に反するものではないだろう。しかし、異なる社会集団が継承し、そのアイデンティティの拠り所とする歴史的・文化的資源は画一的なものではなく、彼らが直面する政治的・経済的条件もまた大きく異なる。よって、生活の主体としての人々が選択し、創出する暮らしを理解しようとするならば、歴史的・現実的な局所性を考慮せざるを得ない。

本稿では北京市の高層集合住宅を対象に、歴史的発展の観点から居住空間の社会的・文化的属性を考察し、とくに国の政策や伝統文化による規定と居住者の個性的創造のあいだに見られる関連性を中心に論じてみたい。

1. 北京市高層集合住宅の歴史

北京市の高層集合住宅の歴史は、政治イデオロギーの影響を多分に受けている。その歴史的な

歩みは、以下の3段階に分けることができる。

（1）睡眠空間としての住宅段階（1949年～1978年）

1949年から1978年にかけて、中国は建国初期の経済回復、第一次五カ年計画の実施、大躍進と人民公社の設立、そして文化大革命を経験した。約30年もの間、中央政府は生活より生産を優先する「低賃金、低消費」政策を実施し、国内では大衆動員による政治運動が繰り返された。その結果、中国の経済発展は大きく阻害され、不動産投資へ流れる資金は非常に限定的だった。この時期の中国に現代的な意味における高層集合住宅はまだなかったものの、一般的な「集合住宅」はすでに出現していた。だがそれは個人が購入するものではなく、国の福利制度において分配されるものだった。中央政府は社会集団ごとに異なる住宅基準を定め、全体的な計画のうえから住まいを分配したのである。

熊^{シオンイエン}燕によると、当時の集合住宅の各種基礎設備や公共設備は規模が小さいうえに劣悪で、都市機能と市民生活の最低水準をкаろうじて維持する程度だったという〔熊 2010:1〕。また一人あたりの平均居住面積も文化大革命時には3.6㎡まで縮小され、それは革命イデオロギーにより動員される労働者の「睡眠のための空間」に過ぎなかった。「空間の節約」を標榜する時代においては、現代的な意味における人間の基本的権利（平和的生存権、プライバシーの権利、幸福追求権など）は軽んじられた。その結果、世代も性別も異なる大家族が一部屋に鮎詰め状態で暮らし、複数世帯が一部屋で共同生活を営む光景が当たり前に見られた。また台所とトイレは共用通路に設置され、寝室やリビング、ダイニング、応接間、収納庫、仕事部屋などのすべてを一部屋でまかなう状況が常態化した。

もちろん、現在の観点から、劣悪な居住環境イコール不幸と見なすのは誤りである。実際、この時代の共同生活を懐かしむ老人も多い。その理由の一つに、当時の集合住宅が生産団体の付属施設であり、隣人や同居人が赤の他人ではなく同僚だったことが挙げられる。特に人間関係が希薄化する現代社会においては、家族同然の同僚と公私にわたり苦楽を共にした歳月は美化される傾向がある。

（2）起居空間としての住宅段階（1978年～1990年）

1978年以降、それまでの計画経済に替わって、社会主義市場経済に基づく改革開放政策が推し進められた。この市場経済への移行期に活性化した北京市不動産市場にも、はじめて「高層集合住宅」という概念が出現し、その建築数は1985年代以降、急速な増加の勢いを見せた。北京市で高層集合住宅が急増した背景には、中央政府が財政・管理システムを通じて個人消費を刺激し、個人が勤労により富を築くことを推奨した結果、都市住民の消費水準と住まいへの要求が大幅に高まった経緯がある。

この時期に建設された高層集合住宅の特徴として、居住面積の飛躍的な拡大が挙げられる。この拡大した居住空間は、住宅建築設計のうえから専用の機能を備えた部屋と多目的で応用が利く部屋に、合理的に分割、配置された。そして寝室で眠り、台所で料理を作り、家族がくつろぐリビングで接客するという当たり前の生活が、高層集合住宅に根付きはじめるようになる。またこ

の時期から、市場に流通する現代家電（テレビ、冷蔵庫、扇風機、洗濯機、エアコンなど）のユーザビリティを考慮した空間が、高層集合住宅の建築設計に取り込まれはじめた。改革解放後、現代家電の普及により中国人の生活様式は激変したが、高層集合住宅の住民についていえば、それは住民自らが住宅建築設計の期待に応え、高層集合住宅の生活に相応しいと考える現代的要素を取り入れた結果でもあると言える。また、人口規制政策の結果出現した小家族化の傾向を汲んだ間取り設計が考慮されはじめたのも、この頃からである。

しかし、北京市の高層集合住宅は特有の課題にも直面していた。首都であるがゆえに各政府・軍機関や各種団体組織が集中し、住宅分配などをめぐる既得権益集団の勢力が極端に肥大化した結果、住宅制度改革が遅々として進まなかったのである。1992年に「北京市住宅制度改革実施法案」が制定されるまで、一部の高層集合住宅は旧来の住宅分配制度に引きずられ、完全な商品住宅として不動産市場に流通することができなかった。こうした高層集合住宅は必ずしもその商品価値を高めなければいけないわけではなく、拡大した居住空間についても上記のような住宅建築設計は行われないケースが多かった。

（3）小康状態の住宅発展期（1990年以降）

1990年代以降、小康社会の実現を目指す中央政府にとって、住居環境は基本的な経済生活指標の一つと見なされた¹。1990年代後半には「人間本位」の姿勢を貫き、住居の利便性、快適さそして調和を目指す姿勢が打ち出され²、明確な「小康居住基準」³も制定された。この流れを受けて、中国の不動産市場は急成長し、各種サービス施設とさまざまな機能を持つ居住区が整備され、それぞれにふさわしい等級も設けられた。都市住民は自らの購買能力と需要に即して、異なる類型、異なる等級の住宅を自由に選択できるようになった。人口が過密化する北京では、とくに高層集合住宅の建設が急ピッチで進められた。

現在、一般的な都市住民が「住宅」と聞いて思い浮かべるのは高層集合住宅である（附録1を参照）。彼らが考える「住宅」あるいは高層集合住宅は、かならず隣近所とのあいだに明確な境界線が設けられている⁴。住居内部には最低限でも寝室や台所、ダイニング、トイレ、居間、収納などの基本的な空間が含まれ、その構造部と非構造部のうち、後者について住民は自由に変更を加えることができる。また、光や音、熱、給水、通風、交通、緑地、買い物、娯楽、駐車場といった住環境が整備された区画に建てられている。現在の都市住民が「当たり前」と受け止めるこのような高層集合住宅の概念は、1990年代以降爆発的に増えた不動産会社⁵や、いたるところに垣間見える大衆メディア、そして国の住居政策などが共同で創り上げたものだと言ってよい。

この時期に建設された高層集合住宅の内部は、各部屋の機能が具体的に考慮された間取りになっている。たとえば共用空間は玄関付近に、寝室は奥に、台所とトイレは共用空間とプライベート空間の間に配置される。全体的に見て、この時期の住宅建築設計は「公私分離、食寝分離、居寝分離、清汚分離」の方向に発展しているが、これは「人間本位」の「小康居住基準」として要求される「文明的規範」という住宅設計理念であり、しだいに住民たちが当然視する居住文化の一部となっていった。

また、中流以上の市民をターゲットにした高級高層集合住宅には、一般的な高層集合住宅には

あまり見られないゲストルームや子供部屋、書斎、トレーニングルーム、使用人部屋、衣裳部屋といった空間が用意され、より繊細で、居心地良く、利便性を追求した作りになっている。そしてこうした高級高層集合住宅が並ぶ区画の自然・社会・人文環境もより快適に、便利になっている。

だが、住宅分配制度が廃止され、不動産市場による商品住宅提供に一本化されると、多くの課題も浮上した。たとえば収益のみ重視して無計画に建てられた高層集合住宅が古都北京の景観を乱していること、投機目的の購入により空室が増加したこと、また住宅価格が暴騰した結果、低収入層による住宅購入がむずかしくなり、社会的な不平等が生じていること（附録2、3を参照）などがそうである。こうした問題を解決するために、政府は高層集合住宅の建設に制限を設け、住宅保障制度の補完に力を注いでいる。

北京市の高層集合住宅はさまざまな課題を抱えながらも、最低限の生理的要求を満たすだけの空間から、小康社会の暮らしにふさわしい現在の姿まで発展を遂げてきた。そしてその生活世界もつねに同一だったのではなく、社会と経済の成長プロセスのなかで絶え間なく構築され、変容してきたことが理解されよう。

2. 高層集合住宅内の生活様式

中央政府が異なる時期に異なる目標に基づいて異なる住宅制度を実施した結果、北京市の高層集合住宅には複数の類型が混在することとなった。たとえば初期に建設された高層集合住宅は福利的に現物支給された「福利住宅」であり、その設計理念は未熟で、区画環境もあまり整っておらず、現在は70歳以上の退職者がその主な住民である。市場経済への移行期から1990年代後半までに建設された高層集合住宅は「半商品住宅」が多く、勤務先が職員の福利として住宅購入資金を一部負担する「半福利住宅」や、建設地にもともと住んでいた住民に優待価格で提供された「回遷房」などが含まれる。21世紀以降建設された高層集合住宅のほとんどは、貯蓄額の多い退職間近の年齢層や購買能力の高い中流階級以上をターゲットにした「完全商品住宅」だが、経済的・社会的な不平等の是正を目的にした「半福利住宅」（住宅購入費を補助する「経済適用住宅」や最低限の生活を保障するために廉価で貸し出される「廉租房」など）も一部を占めている。後者の主な住民は低所得者や貯蓄額の少ない若者である⁶。

このように、一言に高層集合住宅といっても異なる類型があり、それぞれに異なる傾向を持つ集団が暮している。そして当然のことながら、そこにはそれぞれ異なる「当たり前」の生活様式が存在する。この点だけを見ても、高層集合住宅の建築設計と地区計画によって構成され、また住民が主体的に創造する生活様式を把握することは容易ではない。ここでは調査を行った北京市チャオヤンチュイガオバイディエンシャンサンジエンファンシャン 朝陽区高碑店郷、三間房郷および豆各庄郷ドウグァヂュアンシャンの福利住宅と半商品住宅で暮らす30世帯（うち19世帯は建設地に暮らしていた元農民、残る11世帯は国営企業の定年退職者）に話を限定して、彼らがその生活様式をデザインする手段について述べてみたい。

（1）室内リフォーム

現在市場に流通する商品住宅は、購入後のリフォームを前提にしているため、その非構造部が

構造部と明確に区分されている。また構造部についても、購入者が個人的な趣味や需要に応じて選べるように、バラエティ豊かな作りのものが揃っている。だが比較的早期に建てられた福利住宅と半商品住宅は、構造部と非構造部の明確な区分がされないまま、画一的に設計、建設されていることが多い。このため、福利住宅と半商品住宅の住民にとって、住宅建築設計はある意味変更不可な所与である。住民たちはそれを当然のこととして受け入れているが、それでもわずかに許された範囲でその能動性を示している。

調査を行ったほとんどの家庭で、すでにある間取りについて、実用的な目的に即した区分けが行われていた。この場合の実用的な目的とは、寝室・リビング・台所・トイレという限られた間取りのうちに、ダイニングや書斎、物置、クローゼットといった特定の機能をもつ空間を増設し、より快適で便利な生活を送ることである。そのために壁を設けて一部屋を二つに区切る家庭もあれば、もっとささやかに、リビングの隅にテーブルを設置してダイニングスペースにしたり、収納すべきものを部屋の隅にまとめて置いたりして、観念の上から一つの空間内に異なる機能区を捻出する家庭もあった。

増設される空間の用途としてもっとも多かったのが、収納スペースである。それはほとんどの福利住宅と半商品住宅の住宅建築設計において収納の問題が考慮されていないためだが、同時に、物を溜め込みがちで中国人の気質や儉約を「^{フッド}婦徳」とする考え方も無関係ではない⁷。中国では、不要品を処分するという行為がともすれば非難の対象にもなりうる。もしもその家の女主人が家計を上手く切り盛りする賢妻ならば、あらゆる物品を保管していずれ必要となるかもしれない将来に備えるはずだという固定観念が根強いのである。とはいえ、日を追うにつれ増えてゆく物品がリビングや寝室、ベランダに溢れかえるようでは、それはそれで後ろ指を指されることになる。とくに親戚や友人が訪ねてきた時に、部屋が乱雑であるというのは男主人の面子を潰すことに等しく、その社会的な地位や信用に影響を及ぼさす。収納スペースの増設は、高層集合住宅の建築設計と中国人の慣習的思考のあいだで、住民が辿りついた一つの折衷案だともいえるだろう。

この他にも、水、電気、ガスなどの住宅基礎設備の改修工事も、普遍的に行われていた。住宅が建設された当初は問題にならなかった基礎設備が、その後想定外の速さで成長した社会に生きる住民の要求を満たせなくなっているためである。こうした住宅にインターネット回線が敷設されていないのはもちろんだが、有線テレビのCATV設備すら不十分であることが多く、住民は個別に配線工事を行うことを余儀なくされている。またタワー型高層集合住宅であれば全館集中暖房になっているのが普通だが、設備の老朽化や設計上の問題から室内温度が十分に上がらない家庭が多く、個別に暖房設備を設置していた。

上記の実用的なリフォームは、住民のライフスタイルの変化や住宅の老朽化などに対処し、より快適で便利な現代の生活を営むために行われたものだが、いずれの例も入居後しばらくの間において実施されている。これと対照的に、入居前や入居と同時に施されるのが装飾目的のリフォームである。今回調査した家庭では入居の際に施した装飾がそのまま保たれており、その多くが面積60cm²正方形タイルをリビングや寝室の床に貼り、台所やトイレに縦20cm横40cmの長方形タイルを壁に貼るという1990年代前後に流行したスタイルだった。また後から転居してきた家

庭では、窓枠や扉を取り替えたり、壁を塗り直したり、錆びた水道管などを建材で覆い隠したりと、いたるところで「新しさ」が演出されていた。いずれも商品住宅で行われるリフォームと比べれば小規模なものだが、こうした装飾リフォームには、「新居」というものはすべてにおいて新しくなければならない、という中国人の一般的な考え方がよく反映されている。これは新居の物理的な新しさが人生の「新たな門出」を象徴し、「新たな生活の兆候」を期待させるためであり、正月に衣類などを新調するのと同様に、巫術的な祈りにも似た心情が込められている。

(2) 室内レイアウトと小物の演出

福利住宅と半商品住宅の生活様式が創出される際、住民の自由意思が最もよく表現されるのが、リフォームに頼らない室内レイアウトや小物の陳列においてである。

家具とその配置

新居への入居に際して「新しさ」が重視されることは先に述べたとおりだが、新居に搬入する家具の新しさも求められる。新居の間取りに合わせた寸法の家具をオーダーメイドすることは、北京市高層集合住宅の住民にとってもはや慣例化した行為である。高層集合住宅内で、その建築年数よりも古い家具を探すのは困難だろう。なぜなら古い家具は、高層集合住宅の間取りにあわない、住宅の現代的な雰囲気とそぐわない、また実用的でないといった理由からたいてい廃棄処分される。例外的に保留されるのは、旧宅から持ってきた折りたたみ椅子や嫁入り道具を入れていた化粧箱程度である。

現在主流となっているのは、住民の個人的な趣味と財力に基づいて、床や壁の色に見合う色彩や質感のオーダーメイド家具を住宅の間取りに合わせて配置し、個々の家庭の雰囲気を演出するやり方である。調査を行った高層集合住宅では、ほとんどの寝室にベッド(ダブル/シングル)とクローゼット、サイドテーブルが置かれ、台所には食器棚が備え付けられていた。リビングにはL字型ソファとローテーブルが置かれ、その正面に液晶テレビが配置されていた。また商品住宅のような独立したダイニングがないために、すべての家庭において食卓はリビングに設置されていた。

新しい現代的な家具をオーダーメイドすることが慣例化する一方で、最近では住民の高尚な趣味と特殊な身分を表現するアンティーク家具の人気も高まっている。今回のインタビューでも、購入したてのアンティーク家具を満足そうに披露してくれる人々に出会った。彼らも入居時には多分に漏れず古い家具を一新しているのだが、近年になってあえて「古さ」を生活に取り入れたのは、それが彼らの高層集合住宅生活に「新しい」価値を与えてくれるからかもしれない。

家電とその配置

調査を行った家庭のリビング中央には、大型テレビが設置されていた。住民たちが高層集合住宅に入居した1990年前後、夕飯後に家族全員がL字型ソファに腰掛け、テレビを鑑賞するのが習慣化していたという。毎日決まった時間に肩を並べて座り、リラックスした状態で一つの番組を見るという行為が、家族間の大切な交流手段であり、その関係性を深めるのに一役買っている。

たことは想像に難くない。だが現在、若い世代のテレビ離れが進んだ結果、テレビ鑑賞は主に中高年の日常的な習慣となっている。また日常的にテレビ番組を見る中高年にしても、かつてのようにテレビ鑑賞を通じて家族との時間を過ごすというよりは、自分の好きな番組を見るために見ていると言った方がいいかもしれない。しかも現在は、多様化したチャンネルで異なる性別や年齢層をターゲットにした番組が数多く放送されている。今回調査した一部の家庭でも、寝室にもう1台テレビを設置し、家族がそれぞれ好きな番組を見て自分の時間を過ごすための環境が整えられていた。

洗濯機と冷蔵庫も高層集合住宅にかならずある家電だが、その配置場所は家庭ごとに異なっている。近年建設された商品住宅とは違い、福利住宅と半商品住宅調査には洗濯機と冷蔵庫を配置する専用の空間が設計されていないことが多い。今回の調査では、洗濯機を台所やトイレに、冷蔵庫を台所やリビングに配置する家庭が多かった。

近年、家電は驚くべき速さで進化しており、機能はより便利に、外観はよりスタイリッシュに、そしてより大衆化した価格を実現している。だが調査を行った高層集合住宅のすべての家庭において、その使用寿命に関わらず買い換えたものはテレビだけであり、洗濯機と冷蔵庫を買い替えた者はいなかった。それはテレビが客人も目にするリビングに置かれ、大型の薄型液晶テレビの有無が家の主人の「面子」にかかわるためかもしれない。しかもテレビはその家庭にある種の誇らしさを感じさせる家電であるだけでなく、まだまだ世帯主世代の日常生活に必要不可欠な娯楽として見なされているからでもあるだろう。だが洗濯機は、ほとんどの家庭で非常に古い型式のものが使われていた。しかも多くの家庭は洗濯機を飾り物のように置くだけで、実際には日々の洗濯を手洗いで行っていた。その理由は水道代と電気代を節約するためであり、洗濯機よりも手洗いの効果の方を信じているからである。彼らはよほどの大物衣類でないかぎり、一年を通じて洗濯機を使うことはほぼない。また、洗濯機と同様に冷蔵庫の古さも目につくが、家庭内でその古さは問題視されておらず、なかのものが冷たくなればそれでよいと考えられていた。

上記の家電以外にも、最近ではIHクッキングヒーターや電子レンジ、各種暖房器具、電気炊飯器、ウォーターサーバー、加湿器、空気洗浄機などが一般家庭に普及しているが、こうした家具は配置場所が決まっておらず、その家庭の空間条件や個人的な習慣に基づいて任意に配置されている。ここで指摘しておきたいのは、今回調査した高層集合住宅の住民にとって、家電は明確な実用性をもった家庭用電気機器というよりは、むしろ装飾機能を持った家具に近い、という点である。その存在価値は持ち主に「所有」されることにあり、「使用」されることにあるとは限らない。高層集合住宅で営まれる現代的な生活には不可欠な物という認識に基づいて購入されるものの、実際にはほとんど使用されないのが現実である。

同様の理由で、調査したほとんどの家庭にエアコンが設置してあったものの、炎天下でもしっかりカバーがかけられ、住民は扇風機で暑さをしのいでいた。それは電気代の関係もあるが、それ以上に多くの中高年の体がエアコンの冷風に耐えられないからである。多くの家庭にとって、エアコンは実用性を有しておらず、そもそも利用することを前提に購入すらされておらず、ただ設置されているにすぎなかった。

インテリア小物の配置

家具と家電以外にも、その家庭の生活様式と趣味はインテリア小物において映し出されている。たとえば調査したある家庭ではリビングや寝室に飾り棚を設け、酒瓶や神像、時代小説、トロフィー、工芸品などを並べていた。これらのインテリア小物は家の主人が日常生活において最も感情移入する空間であり、ある意味その家庭でもっとも神聖な空間である。飾り棚のような専用空間にインテリア小物を配置することによって個人的なアイデンティティを演出する傾向は、男主人に顕著な傾向である。女主人の方はお手製の刺繍などをリビングや寝室の壁に掛けたり、結婚写真や家族写真、子供の写真などを彼女たちがふさわしいと思う場所に飾る。また、小さな背丈が届く範囲にちりばめられたシールや落書きも、子供たちにとってはかけがえのないインテリアとなっている。

こうした小物インテリアにはその家庭の精神的、信仰的な内容が表現されることが多い。調査したすべての家庭において春節には扉や窓、壁に赤い春聯や切り絵が貼られ、関羽公や財神、弥勒菩薩、白門大仙、さらには毛沢東などを祀る神聖な空間が用意されている家庭も少なくなかった。なかには特別な時期に住宅の特別な位置で先祖供養を行ったり、風水の観点から家具を特殊に配置したり、道教の呪符を壁に貼っている家庭もあった。さらにはネットを通じて購入した神秘的な器具により、神秘的な信仰コードを創造している家庭もあった。だがこうした個別的な信仰は、高層集合住宅という人間の生活が集約した世界においては、ある種の異様さを醸し出していた。

3. 生活の場としての住宅区画

住民たちが暮らす部屋だけでなく、階ごとに設けられた共用通路、高層集合住宅の外観、住宅間を区切る道路、共用広場、商店など、これらはいずれも住民の日常的生活世界の区画環境を構成している。区画環境は住民全体が日常生活を営む公共空間であり、すべての住民が区画内の公共事務に参加する権利を有している。だが調査を行った住民のうち、区画活動に関与している者はほとんどおらず、そこに住民の影は見受けられなかった。高層集合住宅で暮らす人々は一様に、「公共」に関する活動は彼らと無関係であり、個人はむしろ関わるべきでないと認識していた。

高層集合住宅区内で表立った活動を行うのは、個人ではなく区画管理業者である。これは不動産の所有者の代表からなる「業主委員会」^{イエヂユウウエイユエンホウイ}から依頼される形で区画内の公共業務を管理する会社なのだが、住民とのあいだには深刻な対立が存在していた。住民側の主張によれば、それは管理会社が区画内の清掃や騒音対策、公共施設のメンテナンスといった業務に怠慢であるうえに、区画内の駐車スペースに私的な仮設建築物を建てたり、袖の下を受け取ってセールスマンや業者が区画内で営業するのを黙認したりするせいだという。確かに、調査を行ったいずれの住宅区画でも、外壁や共用通路いっばいに個人業者の電話番号が書かれた広告シールが張られ、共同のゴミ捨て場は異臭を放つゴミで溢れかえっていた。また区画内には明らかに住民ではない様子人間が闊歩し、共用道路上に無断駐車していた車の持ち主と住民が激しい口論をしていた。そしてこれは筆者が訪れた日がたまたまそうであったのではなく、住民たちにとっては「珍しくもなん

ともない」日常なのだという。

高層集合住宅区内には、管理業者以外にも住民の自治組織である「サービスセンター（フックアップサービスセンター）」が存在する。サービスセンターの職員は基本的に住民投票で選ばれた住民であり、その名が示すとおり住民への「サービス」を業務とするはずなのだが、こちらも管理業者同様、普通の住民とのあいだに親密な関係性は存在しない。高層集合住宅区内のサービスセンターは、事実上政府が出資する社会サービス代行機関だと言ってよい。その日常的な業務は、スポーツ活動の推進や教育の普及、計画出産の推奨、情報提供といった、政府の需要を考慮した「サービス」が中心になっている。調査地となった高層集合住宅区内では、こうしたサービスセンターの存在にあまり住民の関心が払われておらず、若い世代は特にその傾向が強かった。

高層集合住宅で暮らす人々の区画活動への関心の欠如は、共用スペースに対する公共意識の欠如としても現れている。一つの顕著な例として、共有スペースで行われるダンスが挙げられる。毎日早朝と夕暮れ時に、大音量の音楽に合わせて婦人たちが踊る光景はもはや北京名物となっているが、高層集合住宅区では広場や道路といった共有スペースで行われる。連日の喧騒と音楽は日常生活に影響する騒音にちがいないが、婦人たちが気にかける様子はまったく見られない。共有スペースで行われる以上、そこで暮らす住民なら誰もが等しくこれに抗議する権利を有しているはずだが、受験を控えて机にかじりついている学生だろうと赤ん坊を寝かしつけている若い母親だろうと、実際に抗議する者もない。彼らには、長年住宅区内で慣例化している行為について、抗議する権利を有しているという自覚がない。ただそうした喧噪を当たり前の日常として受け止め、やり過ごすだけである。

以上のような住民の区画生活への無関心さ、そして公共意識の欠如は、大勢の日常生活が一カ所に集約された高層集合住宅という居住形態が、かならずしも集団的・共同体的生活様式の形成を促していない例として見ることができるだろう。今回調査した高層集合住宅では、住民に隣人のことをたずねても、「よく知らない」という答えが返ってくるが多かった⁸。一般的な高層集合住宅は階ごとに8から10世帯が暮らしているが、隣同士の交流は乏しく、交流する機会さえ存在しないことが多い。そもそも筆者が調査した高層集合住宅は、住民が勤務先の同僚あるいは同じ村落の農民だったので、入居以前の顔見知りや隣り合って暮らしているはずなのだが、長年の高層集合住宅生活を続けるうちに、かつての親密な関係性は薄れてしまっていた。家族も同然だった「お隣さん」という概念が希薄化しているのである。

こうした状況のなかで、注目されるのが近年のペットブームである。調査を行った家庭の多くが、住宅内に十分な空間が残されていないにもかかわらず、猫や犬、鳥などのペットを飼育していた。そしてペットのために家具の配置を変え、インテリアを撤去し、掃除の方法や食事の内容などを変更する家庭も珍しくなかった。現在、早朝や夕方にパジャマ姿や部屋着の住民が犬の排泄習慣に合わせて散歩する姿は、北京市高層集合住宅区内のありふれた日常の一コマである。また、中国ではペットとして犬と人気を二分する鳥だが、とくに鳥飼育の伝統が庶民に根付いている北京では、日中に鳥籠を持って小鳥と散歩する「遛鳥」リウニョウが、老人の定式化した生活様式になっている。犬にしろ、鳥にしろ、高層集合住宅区内でペットの散歩をする住民は、だいたいきまった時間帯、きまった場所に集い、飼育に関する情報を交換し合ったり、世間話に花を咲かせたり、

と緩やかなコミュニティを形成している。これは広い意味での隣人関係、あるいは希薄化しつつある高層集合住宅の「お隣さん」という概念にふさわしい近所付き合いの形だといえるかもしれない。

4. 課題

高層集合住宅に暮らす住民の日常生活を調査することは、民俗学にとって一つの挑戦でもあるだろう。その調査には、短期間に都市住民との間に信頼関係を築き、その住まいへ足を踏み入れることの難しさが付きまとう。しかも、仮に住居に立ち入ることを許可してもらえたとしても、民俗学者が見ることができるのは、住民が民俗学者に見せたいと願う虚構の「日常生活」であることが多い。また、民俗学が都市部の高層集合住宅に暮らす人々の生活世界を研究対象にした前例は少なく、その問題意識と研究方法ははまだ模索段階にとどまっており、分析ツールとしての概念からして経験的な観察とインタビューから作成しなければならないことも、研究の難しさを増幅させている。

筆者の調査も例外に漏れずこうした難しさに直面し、今回は住宅内外の日常生活について一般的な諸事情を静止画面的に紹介するだけに留まらざるを得なかった。住宅建築設計と住宅区画計画が日常生活の演じられる環境であり、そこで現実として日常生活が演じられているにも関わらず、住民たちが普段どのような具体的実践を通じて日常生活を演じているのかを描けるだけの材料が、十分に入手できなかったためである。たとえば高層集合住宅における家具や家電がどのように配置されているかを見ることはできても、実際に普段それがどのように用いられ、操作されているかを知ることができない。ある家庭に多機能のオープンレンジがあっても、住人はスタートボタンしか押さないかもしれない。さまざまなメニューを提供する有線テレビが引かれていても、リモコンのメニューボタンの存在すら知らない住人がいるかもしれない。ダイニングテーブルがどのように配置されているかを見ても、住民と食事を共にしても、住民が普段はソファーに腰掛けてローテーブルを食卓代わりにしていることは知りえないのである。だが実際には、こうした研究者が知りえないさやかな実践のうちこそ、彼らの日常は表現されるのではないだろうか。

また、ポストモダンを経た現在では、普通の人々が多元的な参照体系を用いて、自らの日常生活を顧みるような自己再帰性 (self-reflexivity) の高まりが存在する。少なくとも 1980 年代以降に生まれた青年について言えば、彼らは知識人やマスメディア、不動産業者などの誘導により、何が「理想的な住宅」なのかを知っており、高層集合住宅の「あたりまえ」についても先行する概念を有している。民俗学が「当たり前」を定義しようとしても、指の隙間から逃れるように把握しきれない曖昧さに直面するだろう。さらに、現代には一つのコミュニティ間の異質化と複数のコミュニティ間の同質化が同時進行する傾向がある。同じ家庭内でも、父親の考える「当たり前」が息子の目には奇怪に映るかもしれないし、その逆もあるだろう。またグローバル・ヴィレッジ化してゆく住民区内においては、「当たり前」が「当たり前」でなく、むしろ「当たり前」など存在しないという現実が、一般的知識として人々に共有されてゆくだろう。

普遍的な「当たり前」が存在しない以上、民俗学はまず特定の個人や集団、コミュニティの生活が構築され、相互作用を生じるプロセスを理解しなければならない。だがもちろん、民俗学は日常生活の構成過程を通時的に描くことで満足すべきではない。都市に暮らす人々の日常生活が絶え間なく構築され、「新生活」の可能性が創出され続けているということは、人々が目指す「かくあるべき」理想的な生活世界があるということである。そして「かくあるべき」理想的な生活世界に相対するところの現実の生活世界には、さまざまな問題が存在しているということでもある。こうした問題を直視し、取り組む術をみつけることもまた、生活の主体としての人間に寄り添う民俗学が担うべき役割でもあるだろう。

たとえば今回調査を行った高層集合住宅では、ゴミ箱が一つしかない家庭が多く、住民たちは収集日を気にすることなく、大量のゴミを無分別に共同ゴミ捨て場に放り投げていた。こうした慣習化した日常的行為に対して、中国民俗学者はその「当たり前」を追うだけでよいのだろうか。それとも、中国人が目の前の「当たり前」を内省的に見つめ善処するのを促すような、「日常生活の啓蒙」を目指すべきなのだろうか。また、民俗学による日常生活批判——民衆のうえに立つ知識人としてではなく自らも普通の民衆として——の可能性なども、今後の民俗学の在り方そのものを問うテーマとして、真剣に議論されるべきだろう。

注

- 1 1991年に国家統計局が中心となって制定した「小康社会の16項目の基本的な経済生活指標」では、すでに一人あたりの居住面積が12平方メートル以上であることが要求されている。
- 2 この方向性を明確に打ち出したのは「国家九五重点科学技術難関突破計画」（1996～2000年）であり、全国各地で29の「国家小康住宅モデル地区」が建設、整備された。このモデル地区の建設は2001年初頭に国の検収を終え、現代化された高層集合住宅の発展に大きく貢献した。当時の建設要求については本稿附録1を参照されたい。
- 3 小康住宅の基準に達するには、居住性（熱性能・空気の質・騒音環境・光環境など）、快適性（設備配置・キッチン設計・視覚効果・面積など）、安全性（住宅構造・防火性・防犯性・防滑性など）、耐久性（構造と内装の耐久性・防水性・防腐蚀性など）、経済性（建築費用の分析と評価など）という5つの条件を満たさなければならない〔熊2010:67-68〕。
- 4 1987年に制定された「住宅建築設計規範」において、ようやく「住宅は間取りのタイプに応じて設計し、一つの住宅に一つの家庭が単独で入居し、玄関、寝室、キッチン、洗面所および収納庫をしなければならない」ことが明記された。
- 5 齊心チイシンのまとめによると、北京市が不動産総合建設開発会社を組織し始めたのは1980年のことだが、不動産市場はその後急速に活性化し、2006年時点で北京市に登録された不動産会社は2958にのぼった。また不動産投資額も1991年から1995年には568.3億元、1996年から2000年には1979.5億元、2001年から2005年には5974億元と急増している〔齊2008〕。
- 6 こうした異なる種類の住宅の出現を決定づけたのが、1994年12月に国の住宅制度改革を受けて北京市が公布した「国務院の都市・地方住宅制度改革に関する決定を推進する通知」である。この中で北京市は次のような制度改革を挙げている。「住宅建設投資は国と雇用先が負担する体制から国、雇用先、個人の3者が合理的に負担する体制へ改変する。勤務先が住宅を建設、分配、メンテナンス、管理する体制からより社会化、専門化された体制へ改変する。住宅を福利的に実物支給する形式から労働に応じて賃金を分配する形式に改変する。中流以下の低収入家庭を対象に社会保障の性質をもつ経済適応住宅と、高収入家庭を対象にした商品住宅を供給する体制を確立する。住宅積立金制度を確立する。住宅金融と住宅保険を成長させる。政策性と商品性が融合する住宅ローン

システムを確立する。標準化された不動産市場を確立し、社会化された住宅メンテナンスと住宅管理市場を成長させる。」

7 今回の調査ではほとんどの家庭のベランダが物置代わりに使われており、あまり世話のされていない観葉植物や子供が遊ばなくなった玩具、必要なときに限って見つけれない工具類、季節外れの衣類や靴などが積み重ねられていた。また多くの家庭の冷蔵庫にはいつから冷凍されているかわからない食品が保存され、クローゼットには永遠に着ることもなさそうな古い衣服が詰め込まれていた。中国ではこうした「溜め込む」現象は、非常に普遍的で、慣習化している。

8 もちろん、住民が隣人について「知らない」といっても、本当に何も知らないとは限らない。隣人と物理的に距離が近いので、ともすればかなりプライベートなことまで知り得てしまうために、「知っている」と言いづらいたけかもしれない。また、「知らない」ということで、物理的な距離の近い隣人との間に心理的な距離を開けてバランスをとっているのかもしれない。

参考文献

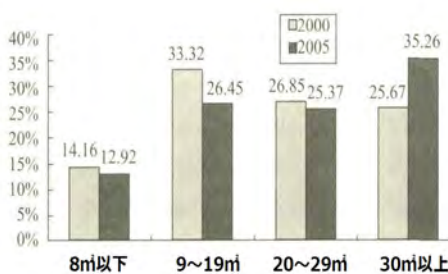
- 熊燕 2010「中国城市集合住宅類型学研究（1949-2008）——以北京市集合住宅類型為例」華中科技大学博士学位論文
齊心 2008「北京住房制度改革：歷程、成就與反思」『北京規劃建設』第9期

表1 都市におけるモデル区画住宅設計の推奨基準

項目	類型	一	二	三	四	
		使用面積 42~48	53~60	64~71	75~90	
間取り別基準面積 (m ²)		使用面積	42~48	53~60	64~71	75~90
		建築面積	55~65	70~80	85~95	100~120
機能空間 使用面積 (m ²)	リビング			18~25		
	主寝室			12~16		
	主寝室以外の寝室(ダブル)			12~14		
	主寝室以外の寝室(シングル)			8~10		
	キッチン			6を下回らないこと		
	ダイニング			8を下回らないこと		
	洗面所			4~6(2つある場合は超過可)		
	玄関ホール			2~3		
	収納庫			2~4(吊戸棚は含まない)		
	仕事部屋			6~8		
キッチン	I型	コンロ、調理台、流し台、吊棚、浄排水設置箇所、換気扇(作業スペース2700mm以下)				
	II型	コンロ、調理台、流し台、カウンター、吊棚、浄排水設置箇所、換気扇(作業スペース3000mm以下)				
洗面所	I型	シャワー、洗面台、便器、鏡、洗濯機設置箇所、通風口(自然換気)				
	II型	浴槽(1.5m)、シャワー、洗面台、鏡、便器(1~2個)、洗濯機設置箇所、換気扇(機械換気)				
標準設備	消費電量	80~200kWh/月				
	負荷	1560~4000W(住宅面積により6000Wまで可)				
	電気メーター	5(20)A~10(40)A				
	電気設備	居室(大)	2~3個			
		居室(小)	2個			
	コンセント	キッチン	3個			
		洗面所	3個			
	テレビ配線口	リビング、主寝室各1個				
	電話	1~2台				
	エアコン配線	隠蔽配線				
給水設備	使用水量200~300L/人日 温水器または温水道管					
暖房通風設備	放射器、空調機(窓の外に設置箇所を用意)					
標準室内環境	採光	≥1%(昼光率)				
	光環境	照明	リビング・一級活動区域	30~70LX		
		居室・読書時	150~300LX			
		ベッドでの読書	75~150LX			
		ダイニング、キッチン	50~100LX			
		洗面所	20~50LX			
	共用通路	15~30LX				
	騒音環境	空気伝搬音の遮音	界壁、界床	≥40~50dB		
		床衝撃音の遮音	界床	≤75~65dB		
		冬季	集中暖房地域	16~21℃		
熱環境 (冬季/夏季)	非集中暖房地域	12~21℃				
	夏季	<28℃				
保健衛生環境	日照(地域による)	大寒2時間~冬至1時間				

附録1 都市におけるモデル区画住宅設計の推奨基準

(「2000年小康型都市・農村住宅科学技術産業工程都市モデル区域計画設計指導原則」より)



附録2 2000~2005年 北京市一人当たりの平均住宅建設面積の変動状況 (中国国家统计局「2005年全国1%人口抽出調査」より)

職業別	年度		増加面積数
	2000	2005	
国家机关、政党組織、企業、事業単位責任者	25.18	31.59	6.41
専門技術者	24.00	29.21	5.21
事務職員およびその関連職員	22.77	27.25	4.48
商業、サービス業の従事者	17.55	20.25	2.70
農、林、漁、牧業の従事者	23.75	26.93	3.18
生産・運輸設備の作業員およびその関連業務に従事する者	20.12	21.91	1.79
その他	22.36	26.10	3.74

附録3 2000~2005年 世帯主の職業別にみた北京市の一人当たりの建築面積 (単位: m²) (中国国家统计局「2005年全国1%人口抽出調査」より)